

学修成果の記述による教育的効果

—全学必修科目「日本語表現 T1」の実践報告—

入口 愛

1. はじめに

愛知淑徳大学では、全学必修科目である「日本語表現 T1」¹を初年次教育の一環として1年生を対象に前期開講している。本科目では、大学の学修に欠かせない文章力（事実を正確にかつ分かりやすく説明する力、論理的に自分の意見を述べる力）を身につけることに重点を置いている²。半期の授業で6回の課題を実施し、実践を通して日本語運用力を養う。課題は学術的な文章を書くための基礎的な文章表現問題が3回、小論文が3回である。平成24年度よりこれらすべての課題提出用紙に「学修成果」欄を設けた。本稿では、「学修成果」欄が学生にどのように活用され、また当欄への記述がどのように課題に反映されているのかを報告する。

2. 「学修成果」欄について

はじめに「学修成果」欄の書式について述べることとする。学術的な文章を書くための基礎的な文章表現問題と小論文とでは当欄への記載事項がいささか異なる。文章表現問題での記載事項は以下のとおりである。

第○回の学修成果—本時の学修で得た気づきと、その成果を上記課題でどう生かしたかを具体的に詳述せよ。

当該回の課題は、授業内に実施したうえで、「学修成果」欄に上記内容を記入し、提出する。一方、小論文での記載事項は以下のとおりである。

第○回の学修成果—本時の学修成果と、それに基づく自分の文章の修正箇所および具体的な修正方法。

当該回では、授業中に予め執筆してきた下書きを学生間で交換し、添削する相互添削を実施する。添削された下書きをもとに推敲し、次の授業で清書を提出する。「学修成果」欄は清書の提出用紙に設けられている。学生は清書したうえで、「学修成果」欄に記入する。

次に「学修成果」欄を設けたねらいについて、確認しておく。ねらいは、各回の授業および課題実施時において得た気づきを記入することによって、自分の学修を客観的に捉えなおす契機とすることである。果たして、このねらいどおりに「学修成果」欄は活用されているのだろうか。

3. 「学修成果」欄の活用状況

本稿では、稿者が平成24年度前期に担当した心理学部(204名)、健康医療科学部スポーツ・健康医科学科(143名)における「学修成果」欄の記述を報告する。まずは、当欄に記入された内容をみていくこととする。

記入内容の多くは、当欄の記載事項として書かれている「授業で学んだこと・理解できたこと」、「課題実施における具体的な修正箇所の提示」であった。それ以外にも「授業内容への質問」、「授業の感想」、「課題実施時に発生した質問」などが挙げられる³。また、当欄についてアンケート調査を実施した⁴。質問項目は以下の四つである。

一つ目は「学修成果を記入することは、自分の学修活動にとって意味があったか」という質問である。その結果、80%の学生が「意味があった」と回答した。

二つ目は上記質問で「意味があった」と回答した者にのみ「どのような点で意味があったか」を尋ねた。最も多かった回答は「課題作成にあたりどの箇所でもどのように修正したのか、どのような点に自分が注意したのかを確認できた」で25%であった。続いて、「次の学修につなげたいことが明確になった」が17%、「自分の理解していないところが再確認できた」が13%、「何を学んだのかがはっきりした」が11%となった⁵。上記の回答結果から、多くの学生は、学修成果を記入することにより、自分が学修した内容は何だったのか、何が理解できて、何が理解できなかったのかを再確認していることがわかる。さらに、

それらをふまえて、次はどうすべきかという課題を見つけている。上記の点において、「学修成果」欄への記入は有効であったといえる。

本科目では第2週から第4週にかけて、学術的な文章を書くための表現技術の基礎を身につけることを目的とし、問題演習形式で授業をおこなっている。当該回では毎時、クラスごとに「学修成果」欄の記入内容をまとめ、翌週フィードバックし、クラスで当欄に書かれた内容を共有した。フィードバックに取り上げた学生のコメンは以下の五つである。

- ①授業で学んだこと
- ②授業中や課題実施時に分からなかったこと
- ③学生の解答例
- ④学生による課題の修正方法
- ⑤授業の感想

②に対しては解説もあわせて、フィードバックした⁶。これらをふまえて三つ目の質問として「「学修成果」欄のフィードバックの共有が、自分の学修活動にとって有益であったか」を尋ねた。それに対して、68%の学生が「有益であった」と回答した。

四つ目は上記質問で「有益であった」と回答した者のみに「どのような点で有益であったか」を尋ねた。59%の学生が「自分の気づかなかったことに気づけた。他人の気づきが自分の気づきになる」と回答した。続いて「前回の授業のまとめになった」が13%、「他人がどのように修正しているのかを確認できた。人の修正方法をまねできる」が11%、「自分と同じようなところを間違えたり、疑問に思ったりしていることがわかった」が10%であった。また、個々のコメントには以下のようなものがあった（原文ママ。傍線は稿者による）。

他の人が書いている意見や疑問は、自分にとって重要なことが書いてある割合が多かったので、勉強になった。

自分の気づかなかった点を友達は気づいていて、なんかもっとがんばろうと思った。

クラスメイトのコメントに共感しながら、奮起している学生の姿も浮かび上がってくる。上記の回答結果から、他人の気づきを共有することによって、改めて学修したことを深化させていることや学生同士が感化しあい、学修に対す

る意識を高めていることがわかる。

4. 「学修成果」欄の記述と課題との関連

多くの学生にとって有益であった「学修成果」欄への記述は、課題作成にどのように生かされているのか。実際に当欄の記述と作成した課題との関連をみていくこととする。ここでは、健康医療科学部スポーツ・健康医科学科1年の学生Aの「学修成果」欄の記述と課題を照らし合わせながら、分析する。

第3週「文法的に適切な文を書く」の「学修成果」欄には、以下の記述がある（原文ママ。傍線部は稿者による。以下、同じ）。

「読み方」と重複するものはなくした。「前」に対して「現在」とあったので「昔」と「現在」で呼応させた。「とてもたくさん」は口語なので「多くの」にして、「ほとんど」も口語なので「大半」にした。文章が長いと主語と述語がわからなくなるので、自分で書くときには短い文の方がいいなど思った。

ここでは授業内容にある文の係り受けについて言及している。傍線部の記述からも一文は短い方が係り受けの関係がわかりやすく、文のねじれが少なくなるという気づきを得ていることがわかる。この気づきは次の課題で生かされているのか。第4週「分かりやすい文を書く」の「学修成果」欄をみることとする。

「なぜなら」の接続詞の呼応をなおした。一方が「第一」とあったので「第二」と対応させた。2段落目の最後の文章は、一文に「件名」が二つあったので、一つなくした。また、2文目の文章を並列の文章にした。他には長い文章を区切って、なるべく短くなるようにした。けど、まだ一文が長いので短い文を適切に書けるようになりたいです。

傍線部からもわかるように、引き続き「文の長さ」について、意識している。この意識は課題作成にも反映されている。当該回の課題では、「一文を短くする」箇所は2箇所あったが、そのうちの1箇所は修正されていた。

続いて、小論文作成週（第5週から第13週）の「学修成果」欄を確認していく。第一の小論文のテーマは「所属している学部学科の紹介」である。所属する学部学科について、長所・短所をふまえて説明する。第一の小論文の「学修

【第二小論文：推敲】

	し	か	し	、	ど	の	ア	ル	バ	イ	ト	ど	も	、	シ	フ	ト	と	調
節	ど	き	る	わ	け	ど	は	な	い	。	ア	ル	バ	イ	ト	先	の	都	合
も	あ	り	、	希	望	あ	り	の	シ	フ	ト	ど	決	め	ら	れ	は	い	場
合	が	あ	る	の	だ	。	実	際	に	、	友	人	の	話	ど	も	、	人	手
不	足	に	よ	り	、	雇	用	者	に	類	ま	れ	て	任	務	が	な	く	シ
フ	ト	と	入	れ	て	い	る	時	が	あ	る	と	言	う	。	そ	れ	に	よ
り	、	学	習	時	間	が	減	る	の	で	学	業	が	疎	か	に	な	っ	て
い	る	と	感	じ	て	い	た	の	だ	。									

下書きには「実際に私の友達の話でも、人手不足により、仕方がなくシフトを入れていている時があり、学業が疎かになっていると感じていたのだ」という一文がある。それが推敲では二文になっている。ここから「文の長さ」については、意識しながら、文章を作成していることがうかがえる。また、今回から新たな課題が記入されている。「学修成果」欄には「一貫性」ということばが書かれ、小論文全体の流れを意識しはじめている。しかしながら、今回の推敲では、論拠で説明を詳しくしたり、学術的な文章に不適切な表現を改めたりするにとどまり、小論文全体の「一貫性」を意識した修正はなかった。

第三の小論文のテーマは「子どもが携帯電話を持つことは是か非か」である。当該小論文の「学修成果」欄の記述は以下のとおりである。

指摘されたところの文章の並列がどうしたら不自然にならず、つなげられるのかわからなくて、難しかったです。他には、話が唐突にならないように説明を加えました。具体例をなるべくたくさん使って説得力があるようにしました。

上記には「文の長さ」に関する記述はないが、前回と同様に下書きを推敲する際に、一文を短くしている。以下は、当該小論文の下書きと推敲の一部である（矢印は稿者による）。

資料2【第三小論文：下書き】

鋼 し	絡手段とほることだ。内閣府の調査によると
	現代の小学生は約80%が習い事に取り組んで
	いる。その中で、送迎をする親との連絡や帰宅
	時刻を知らせる連絡は欠かせることになる。こ
	れらの連絡があることで、安心して習い事に
	通わせることを可能にしていくのだ。中学生
	の場合には、周りで携帯電話を持つ人も増え
	るため、友人とコミュニケーションをとるた
めにも携帯電話が必要となる。	

【第三小論文：推敲】

⑤ 具 作 り	有る背景を考えると小学生の場合、内閣府の
	調査から約80%が習い事に取り組んでいる。
	その中で、送迎する親との連絡や帰宅時刻を
	知らせる連絡は欠かさない。これらの連絡が
	あることで、安心して習い事に通わせること
	を可能にする。中学生の場合、周りに携帯電
	話と所有する友人が増加する。それに伴い、
	コミュニケーションをとるために携帯電話の
	使用が求められるので、携帯電話は必要だ。
	しかし、携帯電話を持つことと生じる

下書きでは「中学生の場合では、周りで携帯電話を持つ人も増えるため、友人とコミュニケーションをとるためにも携帯電話が必要となる」とある。これを推敲では二文に修正している。このことから学生Aは適切な「文の長さ」で文章を作成するという点に関しては修得できているといえる。

また、前回から継続して小論文全体の流れを意識していることが「学修成果」欄の記述からうかがえる。今回は、その点においても修正を加えている。以下、当該小論文の下書きと推敲の一部である（傍線・波線は稿者による）。

【第三小論文：下書き】

しかし、携帯電話を持たせることによって生じる問題もある。それは、

携帯依存だ。友人とのメール、ゲーム、携帯小説などに夢中になり、異常に執着する恐れがある。この携帯依存は、最初のネットエイジアの「あなたの子どもは携帯依存だと思うか」という質問に37.4%が思うと答えた。また、「自分は携帯依存だと思うか」という質問でも思うと答えた割合が高かった。つまり、約5人に2人が携帯依存であり、深刻な問題だ。それに従い、子どもの学力低下が懸念されている。

【第三小論文：推敲】

しかし、携帯電話を持たせることで生じる問題もある。それは、携帯依存症だ。ネットエイジアの「あなたの子どもは携帯依存症だと思うか」という質問に37.4%が「思う」と回答した。また、「自分は携帯依存症だと思うか」という質問でも「思う」と回答した割合が親に尋ねたときよりも少し高かった。つまり、約5人に2人が携帯依存症であり、決して低い割合ではない。携帯依存症は、友人とのメールやゲームなどで携帯電話が手放せなくなり、学習時間の減少につながる。そして、学力低下が懸念される。

下書きでは傍線部「携帯電話を持たせることによって生じる問題もある。それは、携帯依存だ。友人とのメール、ゲーム、携帯小説などに夢中になり、異常に執着する恐れがある」という意見と波線部「それに従い、子どもの学力低下が懸念されている」という意見を関連づけて述べているが、因果関係があいまいであり、論の展開に唐突さを感じる。さらに、両者の間にアンケート調査を用いているが、前後とのつながりがわかりづらい。しかし、推敲では、「携帯依存」と「学力低下」の因果関係を明確にし、両者を関連づけていることがみてとれる。また、アンケート調査を先に述べ、その後に意見を展開している。ここから、話題とすることがらの順序を考え、小論文全体の流れを意識しながら執筆していることがうかがえよう。

最終課題は、本科目で執筆した小論文のうち、任意の1本を選び、書き直しをするというものである。学生Aは第一の小論文を選んだ。以下は、最終課題の「学修成果」欄の記述である。

前の文章には、ただ事実を並べているだけで自分でも何がしたいのか、

文章がバラバラでわからなかったので、今回はなるべく一貫性を持たせるように注意した。

上記にも「一貫性」ということばがあり、小論文全体の流れを意識していることがわかる。課題では記述どおり、小論文全体の流れを意識したものに修正されていた。以下は、書き直し前の小論文と書き直し後の小論文の一部である(傍線は稿者による)。

【書き直し前の小論文】

この学科の長所は、学ぶ分野が広いので進路幅があることだ。主に、健康医科学系、健康スポーツ系、健康環境系が学べる。内容としては、1年次には、栄養生化学、解剖学や生理学といった基礎医学入門など基礎的な体の仕組みや生活習慣から起こる病気について学ぶことができるのだ。2、3年次には、自分の興味のある分野を中心として、1年次よりも専門的に知識を身につけることができる。また、実技スポーツや調理実習などの実習科目も増えるのだ。このような分野を学んだことにより、予想される進路先は、中学校、高等学校の体育教諭、健康食品メーカー、一般企業の健康指導者があると言われている。(中略)

以上のことより、進路が分からない事や企業の就職に良い資格がない事は大きな不安であるが、結局は個人の努力次第だと私は考えている。努力を惜しまずした者が最後には、希望の職に就くことができるはずなのだ。

【書き直し後の小論文】

この学科は、医科学系、スポーツ系、栄養学系の三つの分野に分かれていて、各分野の観点から健康について学ぶことができる。1年生では、これらの概論や栄養生化学、生理学や解剖学を学ぶ基礎医学入門を学ぶ。各分野の概論を学んだことで、2年生や3年生に各人の興味ある分野を中心に学ぶ。現在、専門中心科目は医科学系で12科目、スポーツ系で教職課程に必要な実技も含めて39科目、栄養学系で9科目ある。他にも心を観点に健康について学ぶ科目が7科目あり、専門的な知識を十分に身につけることが可能だ。この学科の長所は、一つの分野に絞るのではなく、他の分野も学べることだ。学ぶ範囲が広がることで、進路の選択肢が増えるの

だ。主な進路先は、中学校や高等学校の体育教諭、健康食品メーカー、一般企業の健康指導者などがある。(中略)

私は以前まで食品会社に勤めたいと考え、栄養学に興味を持っていた。
だが、医科学系の概論を聞いてみて、一般企業の健康管理の職にも興味が
持てた。つまり、幅広い分野の学習により就職先の選択肢が増えたので、
この学科は良い学科と言える。

書き直し後の小論文では、具体的な数字を入れ、説明している。さらに、最後の段落では、前述した「この学科の長所は、一つの分野に絞るのではなく、他の分野も学べることだ。学ぶ範囲が広がることで、進路の選択肢が増える」という点について、自身の経験をふまえて意見を補強している。このように、各段落のつながりを意識し、主張に一貫性を持たせるよう、文章を修正している。

学生 A は、授業で得た気づき、課題を実施することを通して得た気づきを次の課題に生かし、学術的な文章を書くうえで必要な技術を段階的に体得していることがわかる。

5. おわりに

本章では、学修成果の記述による教育的効果として認められることを三つ挙げる。

一つ目は、自らの学修の成果をふり返ることができることである。授業で得た気づきや課題を通して得た気づきを書くことによって学修を再確認することができる。二つ目は、気づきを自己確認することで、そこから新たな課題を発見できることである。三つ目は、学生が自ら課題を発見することによって、積極的に課題に取り組み、自主的な学修活動につながることである。また、気づきを学生同士で共有することも、授業内容における理解の深化という点で教育的効果が認められるといえる。

今後の課題は、「学修成果」欄の記述をどのようにフィードバックするかという点が挙げられる。学術的な文章を書くための文章表現問題では、個々の気づきや修正方法を取り上げ、そのフィードバックを各クラスで共有したが、小論

文における当欄への記述は個々にフィードバックするのみで、クラス全体では共有しなかった。課題作成のうえで、他人の気づきが有効である事実をふまえ、今後はフィードバックの方法についても考えていきたい。

【注】

- 1 全学必修科目「日本語表現 T1」ではテキスト、授業進度、評価基準を統一、教員 9 名（全学日本語教育部門所属教員 6 名 非常勤講師 3 名）で分担し、授業をおこなっている。
- 2 2012 年度授業概要（シラバス）。また、本科目の授業計画は、以下のとおり。
第 1 回 オリエンテーション 第 2 回 文体を考えて書く
第 3 回 文法的に適切な文を書く 第 4 回 分かりやすい文を書く
第 5～7 回 小論文を書く—初級編—
第 8～10 回 小論文を書く—中級編—
第 11～13 回 小論文を書く—上級編—
第 14 回 到達度を確認する 第 15 回 授業のまとめ
- 3 担当クラスでは「授業内容への質問」についても記載事項とすることを口頭で指示した。
- 4 調査期間は平成 24 年 7 月 24 日（火）から 30 日（月）。調査対象は心理学部 204 名、健康医療科学部スポーツ・健康医科学科 142 名。有効回答数は 343。アンケート方式（無記名、選択・記述併用式）で調査をおこなった。
- 5 当質問に対する学生のコメントの一部を以下に挙げる（原文ママ）。
 - ・小論文を書き終わってから、学修成果欄を記入することで、もう一度授業でどのようなことを学び、それを生かして自分はどう直したかを考えることができ、定着度をあげる意味があった。
 - ・自分が意識して改善した箇所が明確になるため、どのような力が身についたのか目で見て分かるところ。
 - ・客観的に自分の学習を見直すことで、次の学習につなげたいことが明確になった。小論文では、前回の授業の学修成果欄に書いたことを意識できた。
 - ・最後にもう一度じっくり見直すことができた（記入欄がなかったら適当に流し読みで終わっていたかも……）。
- 6 学生に配付したものを一部、以下に挙げる（授業内容：「文法的に適切な文を書く」、配付学部：心理学部）。
 - ★第 3 回の学修成果
 - ・「読み方」などという言葉が重複しないように気をつけた。「前」や「でも」などの話し言葉を直した。
 - ・重複されている言葉がいくつかあったけど、どれをなくしたらいいのかわからな

かったです。

→重複の直し方がわからない場合

だぶって使われている語句を一つにし、文を作成する。そのときに、文意を変えないように注意すること！（文がおかしかったり、文意が変わっていたりしたら、もう一度、文を作成しよう）

・文が長くなると、不適切な表現を見落としてしまうような気がした。きちんと理解できるようにゆっくり読むことが大切だと思った。

・文章の意味はわかって、どう直したらいいのわからなくなったり、直しているうちに余計わからなくなったりしたけれど、何度も読み直して、文章の主述の関係を気をつけたり、違う言い回しができるかを考えたりして注意することができた。

・一文ごとに見直して、時制の一致や対応の誤り、係り受けの乱れに気をつけた。

・「その時点で～存在した」→「既存」という熟語に変える。

（全学日本語教育部門常勤講師）